

第26回群馬緩和医療研究会

日 時：平成 24 年 9 月 23 日 (日) 13:00~16:00
会 場：岩櫃ふれあいの郷 東吾妻町コンベンションホール「ふれあいの館」
テ ー マ：「看取りを変える～緩和ケア病棟, 在宅の智慧から学ぶ」
当番世話人：笹本 肇 (原町赤十字病院 外科)
共 催：群馬緩和医療研究会 ヤンセンファーマ株式会社

〈一般演題〉

セッション 1 口演

1. 純粋オキシコドン注射剤(オキファスト®)の登場により今後予測される治療の変化について

高橋 有我, 小林 剛, 斎藤 龍生
(独立行政法人国立病院機構 西群馬病院
緩和ケア科)

【はじめに】 従来, オキシコドン徐放性錠剤 (以下, オキシコンチン®) を内服していた患者が内服困難となった場合, 他のオピオイドへのローテーション (以下, OR) を余儀なくされていた。しかし, 純粋オキシコドン注射剤 (以下, オキファスト®) の登場により, 今後, 不要な OR を行わずに済むようになると予測される。今回, 我々はオキシコンチン®を内服していた症例において, 現在までに OR でどのような問題が生じたか検討し, 今後予測される治療の変化について考察した。【対象・方法】 平成 23 年 6 月 1 日より平成 24 年 5 月 31 日までの期間で当院緩和ケア病棟に入院しオキシコンチン®を内服していた 45 例について, OR の有無やその理由, OR 後の問題点について検討した。【結果】 OR を行ったのは 34 例 (75.6%) で, 理由としては終末期による内服困難が 26 例 (76.5%) と最も多かった。OR 後の薬剤としてはモルヒネが 21 例 (61.8%), フェンタニルが 13 例 (38.2%) であった。OR 後に問題があったのは, モルヒネ持続皮下注に変更後, 増量した際にせん妄が生じた 1 例 (2.9%) のみであった。【考察・まとめ】 OR により問題が生じることはほとんど無かった (97.1%) が, オキファスト®の登場により不要な OR がなくなり, さらに安全な治療が可能になると思われる。今回の症例においては OR を行った 34 例のうち 30 例 (88.2%) が OR を行わずにオキファスト®への変更が可能であった。しかし, 呼吸器症状のある患者や高用量のオキシコンチン®を内服している患者は今後もモルヒネやフェンタニルへの OR が必要

になると思われる。理由として咳嗽や呼吸困難の場合はモルヒネの使用が優先されることや, オキファスト®にはモルヒネのような高濃度の注射製剤がないことが挙げられる。オキファスト®の使用例も含め発表する。

2. がん性疼痛緩和目的の持続皮下注射のマニュアルと患者用パンフレットの作成と安全な実施

南本るみ子, 飯塚さち子, 松田 智恵
熊谷有希子, 村上 廣野, 金澤かるみ
長岡 優子, 黒岩 宏美, 中沢まゆみ
羽鳥裕美子, 徳淵真由美, 塩田麻希子
(独立行政法人国立病院機構
高崎総合医療センター 緩和ケアチーム)

【はじめに】 持続皮下注射実施に関わる医療者に対し, マニュアルの使用前後のアンケートと, 患者・家族にパンフレット使用後のアンケート調査を実施した。これらのアンケート結果をもとにマニュアル, パンフレットが患者・家族に有用であったかを報告する。【方法】 調査研究: マニュアル (医療者) 実施前後アンケート調査, 患者・家族パンフレット使用 24 時間後アンケート調査。対象: 持続皮下注射実施時に対応した医師・看護師 9 名と対象患者・家族 7 名。期間: 平成 24 年 1 月~平成 24 年 6 月。倫理的配慮: 院内倫理委員会で承認され看護師・患者・家族の承諾を頂いた。【結果・考察】 医療者へのアンケート結果を持続皮下注射実施前後で比較すると目的が明確となり必要物品, 刺入部位, 固定方法, 観察項目, 留意事項などの知識や技術の理解が深まった。マニュアルを使用することで医療者が手順を統一して実施することができ安全な実施につながったという結果が示された。また, 医療者のアンケートから刺入部の固定やルート事故除去予防に対する不安がきかれたため, 安全なルート管理や刺入部の固定についての改善策を立てマニュアルを修正していく必要がある。患者及び家族のアンケートからは注射実施のイメージができ不安が緩和されたという意見がみられた。トラブル無く実施されたこ